

The power of a river changes a regional formation
- Changes of Regional Formation through Improvement of the River MOIZARI-

1. 研究の背景と目的

成熟社会を迎え地域の社会資本の充実が必要となる中で、今後は従来より整備の中心と捉えられていた物的整備のみでなく人的ネットワークによるコミュニティの再生や伝統、文化の創造といった非物的な社会資本を再生、創造していくことが持続的に地域環境を再生していく上で重視されている。

そこで本論では、昭和60年代のモデル事業*1により物的な社会資本である河川空間が整備され、その後様々な活動を通して流域地区の価値を高める動きが見られる恵庭市茂漁川流域地区を事例として取り上げ、(1)河川整備を契機とした地区の変容過程を明らかにし、(2)地域環境の再生に繋がる成果と可能性を示すことを目的とする。

2. 研究の方法

①恵庭市のまちづくりに対する理念から地域環境再生に向けた視点を抽出し②関係資料およびヒアリングより恵庭市茂漁川ふるさとの川モデル事業(以下;モデル事業)の整備内容と事業後生じている活動の発生要因と内容を把握・整理することで③地域環境の再生に繋がる成果と可能性を分析する。

3. 恵庭市における地域環境再生への視点(表1)

現在恵庭市は市内の自然環境の計画である水と緑のやすらぎプラン(以下;水プラ)を策定し自然との共生をまちづくりの理念として掲げているが、2004年に水プラが改訂されコミュニティの役割が位置付けられた事から恵庭市のまちづくりの方向性が明確になった。その視点の内容は①自然環境の再生②空間・機能の再生③コミュニティの再生の3つにまとめることができる。

4. モデル事業の経緯についての概要

恵庭市は札幌市と千歳市のほぼ中間に位置する。茂漁川は恵庭市の住宅地を縫うように流れ漁川に合流する。

(図1)

4-1 モデル事業開始までの経緯

1989年まで茂漁川は直線化された三面張りの河川だったが、1980年、水プラに沿う形で河川整備計画が策定された。水プラは恵庭市の自然を生かしたまちづくりの基本となる計画で、これに沿い具体的

なプロジェクトが展開される。さらに水プラとの理念の一致からふるさとの川モデル事業を誘導することで、1990に河川整備事業が開始した。

4-2 河川整備計画の概要

[計画背景]急速な市街化が進む中でコミュニティや生活環境の崩壊が懸念されていた。[計画策定体制]行政と住民の代表者、学識者による整備検討委員会により策定された。[計画理念と方向性]水プラに沿う形で、市街地での自然確保、様々な活動



図1 茂漁川周辺地域

を誘発する空間の創造、コミュニティ形成への寄与などを方向性としている。

4-3 河川整備の推進

事業は恵庭市と札幌土木現業所の協働により推進され、1997年に河川整備は竣工した。

5. モデル事業による整備内容(図2-0)

5-1 物的整備

事業区間全域)

[全域]切り立った三面張りだったが、水辺に近づき易く安全で多様性を持った形状になった。

[河道]切り立った段差だったが、多段式落差工により魚類が遡上し易くなった。

[遊歩道]川沿いは歩行者を意識した形ではなかったが、ウッドチップ舗装により歩き易くなった。

[河川沿い公園緑地]公園緑地と河川は独立していたが、連続し一体的に利用できるようになった。

上流部)

[せせらぎ水路]旧河道部は湿地で人が立ち入らなかつたが、せせらぎを戻し、散策路を整備する事で散歩に適した空間が生まれた。

[ホテル水路]湿地を利用しホテルが生育し易い環境を整えた。

中～下流)

[釣り場]単調な断面形状だったが、形状の工夫により釣場が整備された。

[プロムナード花壇]下流部の階段状広場をプロムナードと位置付け2カ所の花壇を造成した。

5-2 体制整備

[茂漁川親しむ会(以下;親しむ会)]河川整備終了後の維持管理を担う事を目的とし、流域七町内会と老人会により構成された。

5-3 モデル事業による成果

空間:事業の空間整備により快適な河川空間が再生

された。環境:多自然型の整備により多様性のある

生態環境が再生された。コミュニティ:親しむ会の結成と整備検討への参加により河川を軸とした意識形成が図られた。